

2006年7月梅雨前線による大雨がもたらした災害



水・土砂防災研究部 総括主任研究員 中根和郎

2006年7月の後半になって、梅雨前線の活動が活発となり、15日から21日にかけて、北陸から山陰の広い範囲で、断続的に大雨が降り続き、多いところで600mmを越えました。九州でも18日から23日の雨量は多いところで1,200mmに達しました。多くの地域で6～7日間の総雨量が7月の月間平均降水量の2倍を超える記録的な大雨となりました。長野県南部では長雨が続く状況の中で時間雨量20～30mmの激しい雨が降り、各地で土砂崩れ、土石流などが発生し、13人の方々が亡くなりました。被害は北陸から山陰、九州の広い範囲におよび、9月13日現在で、死者・行方不明者30名（土砂崩れ13、土石流8、洪水8、その他1）、重軽傷者72名、床上浸水2,153棟、床下浸水7,844棟の被害が発生しました。図1に今回の災害で亡くなった方々の年齢構成を示しました。

最近の災害事例と同様に高齢者の占める割合が多くなっています。こうした状況を踏まえて、大雨が降ったにも拘わらず比較的死者数の少なかった鹿児島県薩摩地方北部の災害状況について述べます。

薩摩地方北部では7月19日から23日にかけて断続的に大雨が降り、総雨量は多くの観測所で500mmを超え、紫尾山では7月の月間平均降水量570.8mmの2倍以上に達する1,237mmの雨が降りました。降り続く大雨の中で、22日から23日にかけて30～80mmの豪雨が2度に亘って降りました。この時、さつま柏原では1時間に88mmの豪雨を観測しています。このため、各地で崖崩れや土石流が発生し、3名が亡くなりました。河川は各地で氾濫し、2名が川に流され死亡し、鹿児島県で全半壊家屋1,473棟、床上浸水460棟の大きな被害が発生しました。

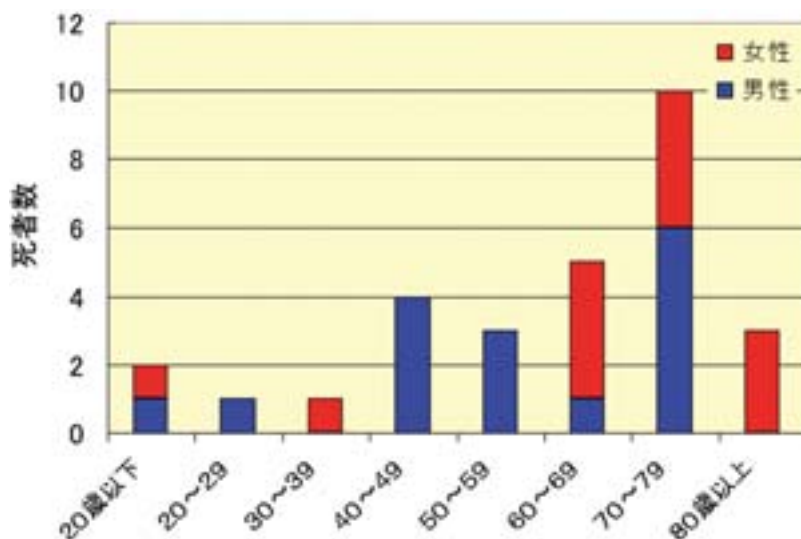


図1 2006年7月豪雨災害による死者・行方不明者の年齢構成

薩摩地方北部を東から西に流れる川内川では19日から23日にかけて上流域で約1,000mm、下流域で約600mmの大雨が降り、上流部の幾つかの観測点で既往最大の洪水位を記録しました。上流部の湧水町、菱刈町、大口町などで河川が氾濫し、河川沿いの多くの住宅が激し

い浸水被害を受けました。川内川の中流部にある鶴田ダムは洪水調節を行い、下流の宮之城地点の最高水位を約1.3m下げましたが、それでもなお、計画高水位を2.9m上回る既往最大の洪水となりました。このため、川内川右岸のさつま町宮之城虎居地区では3mを越す濁流が川沿いの低地を襲い、多くの家が全半壊しました（写真1）。住宅が濁流に押し流され、河川に流失し、橋に衝突する映像がテレビで放映され、大きな衝撃を与えました。川沿いの家屋が3mもの濁流に洗われると、流されるという事実と、木造建物の2階へ避難していることの危険性を改めて実感させました。高い浸水になってからの避難が困難なことから早めの避難が求められます。洪水時には気象警報、洪水予報、水防警報、ダム放流情報、避難勧告・指示等の様々な情報が出されます。日頃からこれらの情報の持つ意味を理解し、どのような状況の時に、



写真1 鹿児島県北部さつま町虎居地区浸水状況
(国土交通省川内川河川事務所
速報—川内川の出水状況より引用)

どこを、どこへ避難するかなど具体的な避難計画を立てておくことが大切です。一方において、その場の状況で判断しなければならないこともあり、状況に応じた適切な判断も重要となります。図2に川内川上流の京町の雨量と、宮之城の河川水位の変化を示しました。図中には、この地域に出された主な情報と発表時刻も記載しました。これらは一つの事例に過ぎませんが、具体的な避難計画を検討する参考にして頂ければ幸いです。



図2 川内川京町雨量(上流部)・宮之城水位(下流部)と防災情報